

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-14

ジョルジュ・バタイユの芸術思想と新たな展開：脱近代への提言

酒井, 健 / SAKAI, Takeshi

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

7

(発行年 / Year)

2021-08-22

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 8 月 22 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02605

研究課題名（和文）ジョルジュ・バタイユの芸術思想と新たな展開-脱近代への提言

研究課題名（英文）A study on Georges Bataille's art theory and its new development : for a post-modern interpretation

研究代表者

酒井 健（SAKAI, Takeshi）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：70205706

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はフランスの総合的思想家ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）の芸術に関する思想を対象にし、新たな解釈の可能性を提言した。研究の方向としてはバタイユの世界への道とバタイユの外への道を設定した。

前者はバタイユのテキストに内在し、彼の芸術論の斬新さを、脱近代的な視点（主客の二元論への批判など）から開示していく道であり、具体的な成果として拙著『バタイユと芸術』（青土社、2019年）の上梓があげられる。後者は、前者での考察を広く西欧の芸術に差し向けて新たな解釈をめざす応用の道であり、成果としては中世キリスト教芸術の来歴を扱った『ロマネスクとは何か』（筑摩書房、2020年）があげられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義はバタイユの芸術論を新たな視点から再把握した点にある。従来の近代芸術論は芸術作品を客体に固定化し、作品の前に立つ主体（芸術家、鑑賞者）との静態的な二元論から作品解釈や芸術家論を展開してきたが、本研究はバタイユの芸術論の新しさを、主体と客体の根源的な交わりおよびその流動性を重視する脱近代的視点から読み解いた。さらにこの成果を中世から現代まで西欧の芸術史の解釈に応用した点にも意義がある。

社会的な意義としてはこの研究成果を逐一、公開講演会の実施や著作の公刊を通して、分かりやすい表現で広く世に呈示して、新たな芸術観の形成へ道を開いた点にある。

研究成果の概要（英文）：This is a study on the art theory of Georges Bataille(1897-1962). He was a French comprehensive thinker in the 20th century and told a lot on art. My consideration followed two paths : path to the inside of his text and path to the outside. First, I took a way to Bataille' world for reinterpreting his new aesthetics from a post-modern perspective (as a critic of the dualism of subject and object). A typical result is the publishing of my book Georges Bataille and the arts(Seido-sha, 2019).The second way is an application of this first research result to Western art interpretation. A fruit of this way is the issue of my book What is the Romanesque art? (Chikuma-shobo, 2020). That is a new proposal for decoding the history of early Medieval Christian art.

研究分野：フランス現代思想

キーワード：バタイユ 芸術 近代芸術論 脱近代

1. 研究開始当初の背景

1) バタイユの芸術思想に関する研究状況 = 総合性に欠ける

ジョルジュ・バタイユ(1897-1962)は、1920年代から60年代に活躍したフランスの思想家であり、著作はきわめて多岐の分野にわたる(文学、哲学、宗教学、経済学、社会学、性科学等)。それ故バタイユ研究は本国フランスにおいてさえ著しく立ち遅れた。彼の学際性を踏まえた芸術思想研究はまだ始まったばかりといた状況である。今やバタイユの重要な二つの三部作『無神学大全』と『呪われた部分』を視野に入れた本格的な芸術思想研究が待望されており、本研究はまずこれをめざした。

2) バタイユの芸術思想と後継の思想家たちに関する研究 = 連続性に欠ける

ピエール・クロソウスキー(1905-2001)とモーリス・ブランショ(1907-2003)はバタイユとほぼ同じ時代に生き、バタイユより長命で次世代に彼の思想を伝えた重要な思想家である。近年この2人についての研究は日仏両国で目覚ましく進捗しているが、しかしそれぞれ単身像を打ち出す段階に留まっている。バタイユとの関連、それも芸術思想の継承という点ではいまだ本格的な研究は行われていない。現存する思想家でバタイユとの関係で重要なジャン＝リュック・ナンシー(1940-)とパスカル・キニャール(1948-)になると研究状況はさらに厳しく、参考になるものは何もない。本研究はこうしたバタイユ以後の芸術思想研究の欠落を埋めることをめざす。

3) バタイユの芸術思想と西欧芸術論一般との関係 = 乖離している

西欧の美術史や美学を研究する者のなかでバタイユの芸術思想に関心を持つ者は数少ない。彼ら西欧芸術研究の専門家によってバタイユの試みが正当に評価されているとはいいがたいのが今日の状況である。本研究はこの乖離を克服することをめざした。そのさいバタイユが彼ら専門家たちから敬遠されてきた原因の一つである客観性の欠如の問題を脱近代的な視点から克服することを本研究はめざした。主体(芸術家、鑑賞者、研究者)と客体(芸術作品)の分離を前提とする近代的なアプローチに染まった既存の芸術研究のスタイルを越えて主客のつながりを促すポスト・モダニズムの見方に従った。

2. 研究の目的

1) 本研究の根本目的 = 20世紀フランスの作家ジョルジュ・バタイユの芸術思想を研究対象の原点に据えその近代性批判の全体像をまず明示し、次にその思想がどのように21世紀フランス現代思想へ受け継がれたのかその連続性を論じ、さらに一般の芸術研究の場でバタイユの芸術思想を応用して両者を架橋することをめざした。

2) 本研究の二つの道

バタイユの世界を志向する道 = バタイユの芸術思想は、芸術分野に閉じているのではなく、哲学や社会学、民族誌学など他の分野とつながりを持っており、本研究もまずバタイユのテキストに内在して、彼の芸術思想の本質を彼の思想全般との関係から割り出していく。

バタイユの外部へ出ていく道 = バタイユの死後、彼の思想は様々な思想家に継承されたが、上記のフランス現代思想の担い手たち(クロソウスキー、ブランショ、ナンシー、キニャール)の言及に注目して、バタイユとのつながりを考察し、さらに一般の芸術研究の場に出て行って、バタイユの芸術思想の応用を試みる。とりわけバタイユが西欧中世の研究から思想家への道を開始したことを重視して、中世キリスト教芸術の研究の場へ、そしてまた彼の美学の現代を問うていくべく、20 - 21世紀の前衛建築の場で、この応用を試みる。

3．研究の方法

基本的な方法 = 本研究は当研究者が単独で 4 年間にわたって行った。この 4 年間の研究の方法としては、パタイユをはじめその後継の思想家たちのテキストの解読、さらに扱われている芸術作品の研究、さらにパタイユの芸術思想の応用研究のための実地調査を基本にすえた。

発表の方法 = これらの研究方法を踏まえて本研究は発表の方法として、国内外での口頭発表、大学の紀要などにおける論文発表、および著作の公刊を基本に据えた。

4．研究成果

パタイユの世界に内在しての成果 = パタイユの芸術思想はとくに初期が重要である。とくに雑誌『ドキュマン』（1929-31 年）に掲載された彼の多くの論考は斬新な発想に満ちている。本研究はまず彼の初期の時代の芸術思想の解明に向かった。その成果として『パタイユと芸術』（青土社、2019 年）をあげることができる。

パタイユの世界の外へ出た成果 = パタイユの芸術思想とその後継の思想家たちとのつながりをまとめた口頭発表、さらに論文掲載という成果をあげることができた。さらにパタイユの芸術思想の応用としては、中世ロマネスク研究の新解釈を提示した著作『ロマネスクとは何か』（筑摩書房、2020 年）、現代西欧の前衛建築家を扱ったオンラインでの講演を主要な業績としてあげることができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 酒井健	4. 巻 82
2. 論文標題 ジョルジュ・バタイユと媒介の思想(2) - 贈与と道徳をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法政大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 33-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 酒井健	4. 巻 18
2. 論文標題 ジョルジュ・バタイユの内的体験と媒介の思想-「非-知の夜」の沼地から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語と文化	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 酒井健	4. 巻 81
2. 論文標題 ジョルジュ・バタイユと媒介の思想(1) - シュルレアリスムと「対立物の一致」をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 法政大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 酒井健	4. 巻 2
2. 論文標題 神話の二つの相-ニーチェ、バタイユ、ナンシーとともに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 多様体	6. 最初と最後の頁 115-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 酒井健	4. 巻 第17号
2. 論文標題 ジョルジュ・パタイユとコミュニオン概念の射程	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語と文化	6. 最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 酒井健	4. 巻 第16号
2. 論文標題 フィンセント・ファン・ゴッホと太陽の美学 - フランス現代思想の視点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語と文化	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 酒井健	4. 巻 第78号
2. 論文標題 プラトンとフランス現代思想 - シェストフ、パタイユ、デリダ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 法政大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 31-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 酒井健	4. 巻 第15号
2. 論文標題 若きパタイユとシェストフの教え - 「星の友情」の軌跡	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語と文化	6. 最初と最後の頁 29-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 酒井健
2. 発表標題 バタイユとナンシーにおけるニーチェの可能性と不可能性 神話の問題系を中心に
3. 学会等名 バタイユ生誕120年国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 酒井健
2. 発表標題 神と神々のゆくえー20世紀フランス思想における神学の問題
3. 学会等名 「多様」と「特異」の作家ーいま、クロソフスキーを（よ）みなおす（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 酒井健	4. 発行年 2020年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 302
3. 書名 ロマネスクとは何か-石とぶどうの精神史	

1. 著者名 酒井健	4. 発行年 2019年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 342
3. 書名 バタイユと芸術 - アルテラシオンの思想	

1. 著者名 酒井健（翻訳とあとがき）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 景文館書店	5. 総ページ数 62
3. 書名 太陽肛門（バタイユの著作）	

1. 著者名 酒井健（翻訳とあとがき）、バタイユ（原著者）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 372
3. 書名 呪われた部分 全般経済学試論 - 蕩尽	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------